

1976～1978年をふり返る

第34期 石瀬徹

小石川高は当時都立では強豪チームであった。都予選準決勝まで進出し、後半終了間際まで大東文化一高を苦しめた。しかし、痛恨のペナルティとなり逆転負け。しかし小石川の名は都立勢の中で唯一強烈な印象を与えた。その小石川が2回戦で城北を破り、3回戦で我が千歳とあたる。結果は4対0。頭が真っ白になり負けた悔しさで涙がとまらない。その時から新たに我々34期のラグビーシーズンがスタートとなった。

キャプテンは、センターの石瀬、副キャプテンはやさしい闘将中島俊朗、ボーカーフェイスのフランカー田村真一郎、器用でやわらかい動きのウイングの斎藤誠。わずか4人の少人数であったが、チーム強化の話はまとめやすかった。また個性豊かな2年生でまとめるには苦労したが、FW、BKS共にバランスのとれた好素材がそろっていた。

プレーの継続を目標におき、新人戦をむかえる。1月早々に目黒とお手合わせ、フランカー板倉、SOは天理、東京三洋へいった飯田など当時から好プレーヤーとされていた相手に23対40。どの位手を焼かせることができるかにポイントをおいていたので、まずまずの出来であった。

目黒の梅本監督は23点の失点が気にさわった様子。顔を真っ赤にして「東名まで走ってこい」の一声で試合後八幡山のグラウンドを走り去った目黒の選手の顔は今も忘れない。やはり頂点を目指すチームはちがうことを実感した。我々も見習わなくてはと思ってはいたが、まわりを見ると全員笑顔でそそくさと帰りたくをしていたのを見てがっかりした。

ところで、この試合がきっかけで東京選抜候補にセンターの石瀬と2年生の巨漢ブロップ中村と土佐が選ばれることになる。実は毎年オール東京は久我山と目黒の混成チームで編成されていたが、なぜこの年は各高校より、よい素材を発掘し、育てようとするラグビー協会のねらいもあり80人近く、各校よりセレクトされた選手が城北高へ集結した。

体力テスト、セレクションマッチを経て20名にしぼり、センター石瀬がウイングとして運もあつたが選ばれた。本人いわく、ラグビーの技術、体力、先を見るゲーム観すべてが新鮮にうつった。後に早稲田のセンターで活躍した佐々木薫、今は帝京大の監督をしている渡辺忠、高校ジャパンの竹田伸光等のプレーぶりは本当に人を生かす冷静さとたくましさを備えていた。

春の大会は小山台に完敗する。その頃ある事件が発生した。一年生部員が千岳荘の帰りのバスで酒をのんだ。この事でラグビー部の責任のとり方でもめにもめた。

当時の監督平井氏、会長の中山氏の所へ石瀬と中島がよばれ、二週間の校内掃除とボウズを指示される。絶対命令ととらえた二人は、部員に指示。2年生から猛反発をくらう。1年生個人の問題であって、学校の体面だけを考へてするのはいやだという。結局その一年生はやめてしまい、我々はボウズ又は、スポーツ刈りになり一件落着したが、チームの和にひびが入る。しかし何とか建て直し、そして地獄の夏合宿へと突入。午後の練習メニューは恐ろしくて話すことができないという林氏。ヘッドダッシュで不規則なキックを繰り返す堀尾氏。とれな

（ 第 34 期
同期生からのことば ）

かったらアゲン。スピードなくてもアゲン。指折り数えてもたどりつかない人生で一番長い一週間であった。しかし体は勝手に動くもので、浦和工業との合宿中の試合では、50対4の圧勝で飾った。

いよいよ、11月から都の予選が始まった。2回戦の相手は豊島実業。豊実の監督はオール東京の監督でもあった石田毅氏。いやな予感もあったが16対10で辛くも逃げきった。3回戦は強豪そして古豪の保善高校。NO.8内田を中心に強力FWを前面にお得意のハイパント攻撃。それでもBKSでは絶対にひけをとらない自信があった。2年生佐藤臣司のステップでゴール前まで攻め立て、こぼれ球を石瀬が拾って飛び込みトライ。この時点で得点は12対16。1ゴール差まで追いつめたが、保善のスクラムにプレッシャーを受けたSH有本のパスがそれた瞬間、相手SHに拾われてトライ。ゴールも決まり12対22で涙をのんだ。負けた悔し涙であったがそれ以上にここまでついてきてくれた後輩達への感謝の涙でもあった。

多くの思い出を千歳ラグビーによって頂いた。楽苦備に乾杯!!

○34期メンバー

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
中	寺	清	池	田	佐	矢	有	齋	齋	佐	石	齋	中	
村	内	水	田	村	藤	野	本	藤	藤	藤	瀬	藤	島	
					(洋)			(宏)	(智)	(巨)		(誠)		

高校の3年間は人生にとってほんの一時期に過ぎないが、完全燃焼した友と過ごしたことが何より一生の宝物としてうれしい。

石瀬徹

きのうの事のような千歳ラグビー時代。素晴らしいチームメイトに巡り会えて良かったと信じています。

中島俊朗

ラグビー祭、合宿で、現役諸君・OBの皆様とふたたび楡円のボールを追いかける事が出来る日を夢みております。

田村真一郎

部員不足は私たちの現役時代も同じでした。春の試合ではラグビーのルールも知らない1年生だった私もかりだされたものです。

齋藤誠

練習を重ねたサインプレーが本番で見事に決まり、トライにつながった瞬間を、一生忘れないでしょう。

マネージャー上村恭子(旧姓山本)

私は暑い日も寒い日も練習を見ることが、とても好きでした。楽しく充実した日々だったと思います。

マネージャー加藤智子(旧姓酒井)